

茜色の歌姫



第二部 大化の改新変



多武峰縁起絵巻

戊是歲、太子、奏請して曰さく、「冀はくば倭の京に遷らむ」とまうす。天皇、許したまはず。
皇太子、乃ち皇祖母尊・間人皇后を奉り、併せて皇弟を率いて、往きて倭飛鳥河辺宮に居
します。時に、公卿大夫百官の人等、皆隨ひて遷る。是に由りて、天皇、恨みて国位を捨りたまは
むと欲して、宮を山崎に造らしたまふ。

額田王、近江天皇を思ひて作る歌

君待つと 我が恋ひ居れば 我が宿の

すだれ
簾動かし秋の風吹く

〔万葉集〕第四卷)

第三章 謀の都

653

難波の長柄宮は、東西が七町(約630メートル)、南北が六町。飛鳥の板蓋宮に数倍する広さを誇る。朱に塗られた朱雀門をくぐると、広大な庭が拡がり、左右に殿舎が並んでいる。朱雀門から四町歩くと、塀に囲まれた内裏があり、その前殿に当たる大極殿で朝議が行われる。その奥の内裏には、大王と、大王に使える妃や采女以外は足を踏み入れることはできない。

白雉四年(653年)春――。

この日の朝議は、前年秋に諸国に命じてつくらせた戸籍が、大王に献じられる儀式でもあった。五十戸を一里とし、里ごとに長を置き、それぞれの長に命じて、各戸の家族構成や所有する田畑の広さを調べさせ、それによって税を定める。

だが、恭しく献じられた戸籍を拡げて読むや、大王の貌が曇った。やがて、諸豪族が退出した後、大王は左右の大官どもに、不満を漏らした。

「いずれの戸も、翁や媼、童どもばかりではないか……」

税は、働き盛りの壮丁に割り当てられる。老人や子供ばかりの邑に税を課しても、大きな収益は望めない。

秋には、唐に使節を遣わすことになっている。とても賄いきれるものではない。

眼を伏して、口を開こうとしない大官どもに、大王はますます苛立った。彼等が税を免れるた

めに、自領の戸の壮丁の数を誤魔化していることは明らかだ。

大王は怒りを露わにし、声を張り上げた。

「さらに一度、調べなおせ！」

そのまま踵を返し、奥へと去った。

大官どもは、苦々しげに貌を見合わせ、こもごも、大極殿を出た。

この長柄宮だけで、どれだけの費えがあった？

これ以上、税を課せられては、邑々は疲弊するばかり。

吾が領でも、邑ごと逃散したは一や二ではない。

ひそやかな囁きあいのなか、葛城皇子に音もなくすり寄ったのは、中臣鎌子であった。

「巨勢大臣が吾等に着いた」

鎌子は、囁いた。巨瀬徳陀は左大臣。豪族の筆頭である。葛城皇子は深く領いた。

「では、そろそろ、だな」

鎌子は拝礼し、踵を返して去った。

中臣鎌子の弟で、飛鳥留守司である中臣金が、大海人皇子を河辺宮に訪なつたのは、夏に入つてからであった。

「唐に派した高田根麻呂らの一行が、筑紫の沖にて難船した」

かつて、伊勢から呼ばれた大海人皇子が吉野宮で留められた折り、身の回りの世話をした金は、太った軀を揺すりながら言った。

「舟板にすがって助かったのは、わずか五人」

大海人皇子は、眉をひそめた。遣唐使の舟には、多くの学問僧が乗っていたはずだ。彼等を失

つたのは、大和にとって痛恨事である。

「豊日大王が御位に即きたまいて後、災い事多く、税は上がり、民は疲弊し、諸国に凶事相次ぐ。

これも大王の徳なき故かと、言う者もあり」

遠慮なく語る金に、皇子は貌を顰めた。

「不敬ではないか」

「これは、大和の豪族の総意、否、民の声。皇子よ」

面持ちを引き締め、居住まいを正し、金は声を低めた。

「葛城皇子よりの使者が参られた。皇子に、難波へ来たまうようにと」

「難波へ？」

「まずは、葛城皇子の宮を訪ないたまえ」

葛城皇子の宮……。

兄は言った。

遠からず、吾等が共に力を合わせ、政事に携わるべき時が来る……と。

「葛城皇子は問いたまうであろう」

中臣金は、さらに厳かな貌を作った。

「七枝の剣は、その在処は分かつたのか否か、と」

皇子の脳が、凍り付いた。

その夜。

大海人皇子は、海部石床を密かに寢屋に呼び寄せた。

「いま一度、問う」

海部石床は、皇子が育った伊勢の海部の一族。八年前、葛城皇子より、七枝の剣の在処を探すよう命じられて後、伊勢に派した舎人である。石床は、年に一度、伊勢に赴き、七枝の剣について、ほうぼう訪ねて回った。大和を統べる王者の証たる剣の在処を、たとえ分かったところで兄なる皇子に明かすつもりは、大海人皇子にはなかった。石床も、それは十分に心得ている。

「七枝の剣のこと、何か分かったことはあるか……」

「いまだ何も……」

石床は振った。皇子はうなずいた。

「ならば……よし」

汝が、八年の歳月をかけて見つからなかった剣。恐らく、その在処を知る者はただ独り……。

田村大王に姦され、自分を産み落とした、母なる巫女、稗田阿礼。

阿礼に訊ねれば、その在処は、たちどころに知れよう。しかし大海人皇子は、自ら伊勢に赴き、あるいは人を派して問う気はなかった。阿礼のことを、大海人皇子を見張っているらしい葛城皇子に知られることを恐れた。

兄に、七枝の剣を渡してはならない……。大海人皇子は、そう感じていた。

「とはいえ」

海部石床は言った。

「難波に行かれれば、葛城皇子は剣のことを問いたまう。如何ように応える心づもりにておわしますや」

「それを今、思索している」

大海人皇子は眼を臥せた。その問いの持つ意味は明らかだった。

そもそも葛城皇子が、大海人皇子を難波に呼び寄せたのは、いったい、何のためか。中臣金の口振りからは、容易に察せられる。

兄は、豊日大王をその座から降ろし、自ら、大王位に即くつもりなのだ。だからこそ、金に大王を誹謗させ、七枝の剣の在処を訊ねさせた。

母なる大王の前で、自ら蘇我軀作に剣を振り下ろし、その息の根を止めた兄が、如何なる謀を企んでいるか、大海人皇子には分からない。

ただ、兄は、欲しいものを手に入れるために、その術（すべ）を選ばない。大王宮で血を流そうと、己が妻を死に追い込もうと、必ず成し遂げる。

そして、兄はまさに今、大海人皇子に問うているのだ。汝は敵か、味方か、と。

兄に敵対する気はない。だが、味方したくもない。争いや諍いの渦中に身を投ずるつもりはない。

「石床よ」

皇子は、しばし黙した後、言った。

「額田郎女を、ここへ呼べ」

「ここへ？」

「然り」

大海人皇子は、眦を引き締めて言った。
「誰にも気づかれぬように」

二日後の夜。

寢屋に独り、褥に横たわっていた大海人皇子は、天井の梁から、かすかに床に飛び降りる音に眼を覚ました。

半身を起こした皇子は、寢屋の隅にうづくまる影に、微笑んだ。

「旦那か」

「その名で呼ばれるのは、何年ぶりか」

旦那……額田郎女は、闇のなかで微笑んだ。開け放った窓から漏れる月の光が、白い貌を照らし出していた。

額田郎女は、髪を後頭部に結い上げ、黒い裳に黒い袴を着けていた。それが、土蜘蛛の女たちが闇を抜けて家に忍び込む装束であろうことは、容易に察せられた。

「葛城皇子が、吾を難波に呼び寄せた」

皇子の傍らに歩み寄り、片膝を突いた額田郎女は、大海人皇子の言葉に、微笑みを消した。

「すでに聞いておるであろう？」

額田郎女は、眼を臥せたまま頷いた。

「しかも皇子は吾に、七枝の剣は如何した、と訊ねた……」

七枝の剣、の言葉に、額田郎女は僅かに眼をあげた。

「七枝の剣のことは、阿礼より聞いていよう」

郎女は、まんじりと動かず、無言だった。

「汝に、頼みたい」

わずかに貌をこちらに向けた郎女に、大海人皇子は言った。

「伊勢に赴き、阿礼に問うてほしい。七枝の剣は、いづくにありや、と」

「それを知って」

額田郎女は、貌を強張らせたまま、問うた。

「如何する」

「兄には渡さぬ」

皇子は応えた。

「大和を統べる者が持つ剣……兄には渡せぬ」

「では」

郎女の声がかすかに震えていた。

「皇子が、それを持つのか」

「否」

皇子は、決然と応えた。

「七年前、蘇我鞍作が討たれ、豊日大王が御位に即いた時、兄なる葛城皇子は、吾に伊勢のいず

くかにあるという七枝の剣を探れと命じた。吾は、言を左右して、探ることをしなかった。しかし、兄がなにごとかを……おそらく豊日大王よりその御位を奪う謀を企てた以上、如何なる術を使っても、手に入れようとする。吾は、自ら、その在処を知ること、剣が兄に渡ることを阻みたい」

皇子は、郎女にすり寄った。

「吾は動けぬ。兄なる皇子の手の者が見張っていよう。故に、汝の力を借りたい」
言い終えて、大海人皇子は、額田郎女の肩が細かく震えているのに気づいた。

「……郎女よ」

「今宵は」

何か言いかけた皇子を制するように、額田郎女は貌を上げて制した。

「久しぶりに、伊勢にいた頃のように、皇子と巫那、ただ二人……」

声は、頬をつたう涙に途切れた。皇子が口を開こうとしたとき、郎女は言葉を継いだ。

「しかし皇子は、吾を土蜘蛛に還れと言う」

「否……」

膝を進めた皇子の股間に、郎女の手が伸びた。ふぐりを掴まれ、鋭い痛みで皇子の総身が強張った。

「ならば……」

郎女は、射抜くように皇子を見た。

「吾は、土蜘蛛として、七枝の剣の在処を、阿礼に問おう」

ふぐりを掴む額田郎女の手に、力がこめられた。皇子は、眼を閉じて呻いた。

「土蜘蛛は、誰にも随わぬ……皇子の意のままに動くかどうかは、分からぬぞ」

額田郎女は、今にも気を失いそうになった皇子を、床に押し倒した。

烈しいまぐわいの夜が明け、褥で目覚めた皇子は、独りだった。傍らに居るはずの額田郎女の姿は消えていた。

皇子の腰に跨り、荒々しく軀を動かして快を求めた郎女のしなやかな裸身が、臉に蘇った。

さらに、郎女や、十市皇女や讃良のことを、何も問わなかったことに気づいた。

巫那……。

皇子は呟き、両手で貌を覆った。

それから十日。

ついに、額田郎女より何の報せも届かぬまま、難波へ赴く期日となった。

大海人皇子は、十市の邑に舍人を遣ったが、郎女はずっと不在のことだった。皇子は、数名の舍人を随れ、河辺宮を出て、難波へ向かった。

もはや……。

舟で難波へと下りつつ、皇子は川の水面を見つめ、心の裡で呟いた。

かつてのように、ひたすら睦み合うわけにはゆかぬ……。

葛城皇子は、政事をめぐる争い諍いに、大海人皇子を巻き込もうとしている。忠実な舍人は

いるが、強力な味方を持たない皇子は、額田郎女の、土蜘蛛として磨いた技に頼らざるを得ない。かたや額田郎女は、十市皇女の母として、讃良の養い母として、静かな暮らしを希っている。荒れた崖の上の洞で、阿礼とただ二人で育った郎女が、肉親の情をどれだけ大切にしたいか、同じく孤児として育った皇子には、痛いほど分かる。

だが、それはもう許されないのだ……。

皇子の脳裡に、かつて、伊勢の宮で巫那が語った物語が蘇った。

天宇受女、天の石屋戸に覆槽伏せて踏みとどろこし、神懸りして、胸乳を掛け出で、裳の緒を陰に忍し垂りき。ここに高天の原動みて八百万の神、共に笑いき。

……ここに、天宇受女なる者、足を踏みならして踊り、衣をはだけ、その胸乳と陰を見せた。神々はどつと笑った。

巫那が舞っていた。村国男依、海部石床、朴本大国が、手を打ち鳴らし、和していた。

もう、あの頃へは戻れない……。

大海人皇子の頬に涙がついた、舟は静かに、難波へと進んでいった。

難波の大郡宮は、海辺にあり、近くに津が築かれ、諸国の舟が出入りする、すぐ側にある。

宮門をくぐると、中庭に、派手に着飾り、異国の言葉を喋る人々の群れがいた。

「百済と新羅の使」

出迎えた中臣鎌子が、指さした。

大海人皇子の耳には、鳥がやかましく囀っているようにしか聞こえなかったが、よく見れば、

人々は二手に分かれ、互いを罵り合っているようであった。

いづれが百済か新羅か、大海人皇子には見分けがつかない。ただ、双方の敵意の激しさは、尋常ではなかった。

鎌子が続けた。

「新羅は、いよいよ軍を興し、百済に攻め入る気配。故に、百済と新羅の使同志が、言い争っている」

大陸よりの文物は、すべて百済を通してもたらされてきた。その百済が、長年大和と敵対してきた新羅に滅ぼされれば、大和は瘦せ衰える。如何なる策を用いても、阻まねばならない。

中臣鎌子の語りを聞きつつ、大海人皇子は、別のことを考えていた。

この大郡宮こそが、いわば大和の外交の場である。その宮に葛城皇子が住まっている。すなわち葛城皇子は、唐や三韓との間に微妙な問題を抱える大和の、政事の要を抑えている。

「よくぞ来た」

大海人皇子を出迎えた葛城皇子は、相変わらず磊落であった。

「兄なる皇子よ」



難波宮復元図

湯が運ばれ、喉を潤した後、大海人皇子は、恐る恐る切り出した。

「七枝の剣のこと……」

「未だ、見つからぬのであろう」

葛城皇子は、土器の湯を飲み干しながら、こともなげに言った。

「吾も、舍人を派して探らせているが、何の手がかりも分からぬ。それよりも」

葛城皇子は、肩を落とし、貌を近づけた。

「明日の朝議には、出でよ」

明日？ 大海人皇子は、身の裡が強張るのを覚えた。明日、何が起こる？

「何が起ころうと、汝は吾が言うままに動け」

葛城皇子の眼が、暗く光っていた。その光に気圧され、大海人皇子は頷くしかなかった。葛城皇子は、唇の端を歪めて笑い、背を伸ばして言った。

「疲れたであらう」

今宵は、ゆつくりと休め、という葛城皇子に、大海人皇子は、寝られぬ夜になる、と気が塞いだ。

大海人皇子が退出した後、葛城皇子と中臣鎌子のみが残った。

「大海人皇子には、吾等の企ては何も知らせておらぬな」

「然り」

「重ねて問う。大海人皇子は、何も知らぬのだな」

「然り」

「ならば、よこ」

葛城皇子は、深く頷いた。

「いよいよ、明日。汝のこと、いささかも手抜きはあるまい」

鎌子は俯いたまま、かすかに顎を動かした。

「汝も、邸へ退がれ」

「さらば……」

静かに退出する鎌子を一瞥し、葛城皇子は闇を見据え、拳を握りしめた。

七枝の剣は、手に入らない。それも仕方あるまい。いずれ、大王の御位に即いた時、人を派して必ず手に入れる。まずは、力と謀を以て、今の大王を倒す……。

身の奥底より、震えが沸き上がった。葛城皇子は、己が手で両腕を掴んで立ち上がった。

中臣鎌子が、長柄宮に近い己が邸に戻ったのは、すでに夜更けであった。葛城皇子の大郡宮を退出した後、鎌子は油断なく、謀の同志である主だった大官どもの邸を訪ね回った。一大事を前に心が揺れ動く者が出ぬとも限らない。まず、牽制し、確かに釘を打っておく必要があった。

「すぐに寝む」

出迎えた伴部どもに告げ、馬を下りた。

鎌子には妻がない。生まれてより、女とまぐわったこともない。美まし女を見て、まぐわおうと思つたこともない。性欲というものを備えぬ己が軀を、若い鎌子は恥じた。やがて鎌子は、

中臣の家の復興に、すべての欲を傾けた。

かつて中臣は、神事を以て大王家に仕え、家柄は蘇我と拮抗していた。鎌子の祖父、中臣勝海の代、蘇我馬子の謀により、逆賊の汚名を着せられて勝海は討たれ、中臣の家は傾いた。

貧しさと裏腹の誇りが、陰なる気を醸す家に育った鎌子は、己が身を託すに足る人を求め、葛城皇子の知己を得た。

この皇子をやがては大王となし、自らは大臣として政事を司る。

大和を、新羅や百済はおろか、唐にも劣らぬ強国となし、その武威を四海にあまねく輝かせる。

二人の野望は、暗い密談の裡に、途方もなく燃え広がっていた。

蘇我鞍作を飛鳥の板蓋宮で討つたことなど、その足がかりに過ぎない。

明日、長柄宮の朝議の場で行われる謀は、いささかの瑕疵も許されない。

板蓋宮で鞍作を討つたときには、土蜘蛛の手を借りた。土蜘蛛は、確かに鞍作とその父毛人を討つた。しかし、国史は、土蜘蛛の手に落ちた。

この度の謀は、土蜘蛛を束ねる鏡郎女には一切、漏らしていない。葛城皇子の意のままにならぬ鏡郎女に、謀の一端でも漏らせば、如何なる事態となるか、とても予期できない。

手ばかりは……鎌子は、寝屋に入り褥に坐し、反芻した……何もないはず。

後は眠る。眠って明日の大事のための鋭気を養う。眠気が、大事の妨げにならぬとも限らない。妨げが起これば、己の後の半生を損ないかねない。

鎌子は、仰向けに臥した。壁に穿つた窓から、月明かりが漏れている。簾を降ろそう。鎌子は起きあがり、壁に向かって歩んだ。少しでも、長く眠りたい。

簾を降ろそうとした鎌子の背後に、天井の梁から舞い降りた人影が、かすかな音を立てた。鎌子は振り返った。月明かりが、白い貌を照らし出した。

汝は……。

声を発しようとして、喉元にざらりと光るものが眼に映じた。

剣の切っ先だった。

「安見娘……か」

喉元に切っ先を突きつけられながら、中臣鎌子は声を絞り出した。

「吾が名を覚えていたか」

安見娘は、剣を擬しつつ、微笑んだ。

誰が漏らした……。

鎌子の脳裡をめぐったのは、剣を突きつけられた己が身の危うさではなかった。幾人かの大官の貌が浮かんだ。最後まで謀への参加を躊躇っていた者。変わり身が早く、油断のできぬ者。豪放そうに見えるが、その実は、気弱な心を振る舞いで覆い隠している者……。

「内臣よ」

安見娘は、冷たく笑った。

「誰も、汝等が謀を漏らしてはおらぬ。吾等が知っただけのこと」

鎌子は、瞳を動かすことなく、安見娘を見つめた。土蜘蛛どもが、どこまで謀を知っているか、まずは喋らせるしかない。

「何より吾等は、汝等が謀が如何なるものかは、何も知らぬ。ただ、謀があることのみを知っている」

鎌子の額から、一筋の汗が垂れ、眉を濡らした。

安見娘は囁くように言った。

「汝が心など、たやすく読める。まずは汝自ら、如何なる謀か、語れ」

鎌子は眼を臥せた。咄嗟に、意を固めた。

如何なる手で苛まれようと、決して口を開かぬ。開けば、葛城皇子の信を失う。信なくば、大望を果たすことはできぬ。

その意も見抜いたように、安見娘はあざ笑った。

「さて、吾等が苛みに、耐えうるか」

言うなり、安見娘は右脚を跳ね上げた。爪先が鎌子の股間をしたたかに打ち据えた。鎌子は呻きを漏らし、床に両膝を突き、両手で烈しく痛むふぐりを抑えた。激痛に息もできず、両眼から涙が漏れた。

「よき獲物よ」

鎌子の口に、布を固めた玉が押し込められ、顎から鼻にかけて布を巻かれた。安見娘は、指を折り鳴らしつつ、言った。

「夜は長い。楽しもうぞ」

夜の闇に、巨大な長柄宮の扉が、くろぐろと聳えていた。

穿たれた三つの門の前に、篝火が焚かれ、寝ずの番の兵が矛を構えている。彼等の背後に、黒い人影が忍び寄った。兵どもは皆、音もなく倒れた。

兵を倒した黒ずくめの者どもは、軽々と扉を越え、内側から門を開けた。倒れた兵どもの軀が扉の内に引きずられた。そして、闇のなかから、同じ装いの新たな兵どもが現れ、矛をたてて門前に立った。

長柄宮は、何事もなかったかのように、再び静まり返った。

「やはり、思ったとおり」

安見娘は、中臣鎌子の頬を軽く叩きながら、薄く笑った。

「葛城皇子が謀の片腕と見込んだ男よ」

鎌子は、貌をあげて安見娘を見ようとした。しかし、すでに貌じゆう赤黒く腫れあがり、臉は重く開かない。

天井の梁にぶらさげられた荒縄に左右の手首を縛られ、吊り下げられた鎌子は、何もまどわず、傷と蚯蚓腫れに覆われた裸身を曝していた。

「ふぐりをひとつ砕かれてもお」

安見娘は、鎌子の脚の付け根にぶらさがった陰囊を指で弾いた。鎌子の全身が強張り、頭をのけぞらせた。

「悲鳴もあげず、何一つ、漏らさぬとはの」

鎌子の左側のふぐりはすでに元の形をとどめず、陰囊は血を含んで常の三倍に膨れ上がっている

た。

「残る一つを砕いてもよいのだが」

安見娘は、楽しげに歌うように言い、残る右側のふぐりを指でつまんで圧した。鎌子は烈しく身悶えした。

「それもまた、惜しい」

柔らかな安見娘の指が、硬くそそり立つ陽物を包み込んだ。両手で握りしめてもなお余る長さだった。

安見娘は喉を鳴らして笑った。

「ふぐりを痛めつけられてこそ、汝が男の根は、勃つのだな」

安見娘は、ゆつくりと両手を動かした。布でふさがれた鎌子の唇から、荒く吐息が漏れた。

「いまだ、まぐわいの快を知らぬ汝に、それを教えよう」

跪いた安見娘の唇が、鎌子の陽物をくわえた。

ほどなく、鎌子の軀がゆつくりとのけぞり、やがて大きく震えた。

「如何であつた」

安見娘は立ち上がった。その唇の端から、血の混じった精液がわずかに滲んでいた。

「忘れ得ぬ快であろう」

鎌子のがっくりと頭を垂れた。どんな責め苦にも、傲然と貌をあげて耐えていた鎌子は、生まれて初めて精を漏らし、すべての氣力を使い果たしたように、微動だにしなかった。

「汝等が謀など、すでに全て知っている」

安見娘は、鎌子の手首の荒縄をほどきつつ、言った。鎌子の軀は、ばたりと床にくずおれた。「ただ、汝が長柄宮の朝議にいられては、何かと障りがある。しばし、政事の場合より、消えてもらうがため」

さらに……。安見娘は吹きつつ、仰向けに倒れた鎌子の傍らに膝をつき、手を延ばして、いまだ勃然とそそり立ったままの陽物を握りしめた。

「汝を、吾に服せしめるために」

安見娘は、背を折り、鎌子の股間に貌を埋めた。

大和の朝議は、夜明けとともに行われる。

内臣は、夜明け前に王宮に参内し、大王と、その日の朝議について打ち合わせをする。そのため、中臣の邸は、他の豪族の邸よりも早く起き出す。

中臣鎌子の寝屋の扉を叩いた伴部どもは、身に何一つ纏わず、血塗れで仰向けに倒れている主の姿に息を呑んだ。たちまち邸内は沸き立ったように騒がしく、医師を呼べ、まずは薬湯を、と伴部どもは口々に喚いた。気のきいた者が、まずは王宮へ報らせよ、と言い、一人の伴部が、馬にまたがり、門を走り出でた。

難波は海に近く、ところどころ沼地が多く、王宮までの道は、丈の高い葦原の中を突き抜けて行く。焦って馬を駆けさせる伴部は、道の傍らの葦に潜む人影に気づかなかつた。

不意に葦から走り出でた者がいた。伴部は慌てて手綱を引き絞り、馬はいなないて棒立ちとなつた。転がり落ちてしたたかに腰を打った伴部がやっと立ち上がると、目の前に、白い袴姿の女

が立っていた。手に、先ほどまで乗っていた馬の手綱が握られている。

「何故に道をふさぐか！」

伴部は叫んだ。

「疾う、どけ！」

女が笑った。同時に、その右脚がはねあげられた。

爪先で急所をしたたかに蹴られ、伴部は白眼を剥き、股間を両手で押さえ、道に座り込んだ。

「すでに砕けているやもしれぬが」

青ざめた貌で細かく唇を振るわす伴部の髪の毛を右手で掴み、女——安見娘は、耳元で囁いた。

「悪くは思うな。しばし、そこらで寝ていよ」

安見娘の膝が、伴部の貌にたたきつけられた。伴部は鼻から血を噴き、仰向けに倒れ、後頭部を打って動かなくなった。

安見娘はすばやく伴部を縛り上げ、葦原に放り込み、馬に飛び乗り、長柄宮に向けて走り去った。

長柄宮の内裏では、朝の湯浴みを終えた豊日大王が再び寢屋に戻った。

一人の采女に率いられた二人の女孀が、床に額づいていた。

大王は軽く頷き、両手を差し上げた。二人の女孀が立ち上がり、大王の背後に回り、衣服を着せ始めた。

采女が貌を上げた。

「見ぬ貌だな」

大王は言った。年は二十も終わりか。白い貌に、切れ長の一重瞼、厚い唇が、起きたばかりの

大王の肉を刺激した。

「いつ、内裏に入った」

「三日前より」

采女が伏し目がちに応えた。

「いづくより来た」

「出雲より」

出雲は、美まし女を産する地。大王は、裳に覆われた新参の采女の四肢を思いめぐらしつつ、言った。

「では、よく励め」

采女は拝礼し、言った。

「中臣より使者が参内した」

「中臣から？」

「鎌子の内臣は、心地悪しき故に、朝議には出でられず。子細はこの書に」

采女が差し出した書に、豊日大王は眼を通した。新たに唐に遣わす使について、鎌子が推す名が連ねてある。

「うむ」

豪華な錦織りの紫の袍に、龍の紋様の入った金色の玉帯を垂らし、真珠の簾が下がった冠

をかぶり、威風を正した豊日大王は、つと顎をあげて問うた。

「官どもは、みな集うておるか」
采女は頷いた。

豊日大王は、ゆつくりと足を踏み出した。

鎌子がいはい——。

銅鑼が鳴り響き、大王の出御を告げた。

太極殿に居並んだ大官が一斉に拝礼するなか、葛城皇子は、胸騒ぎを押さえられなかった。

何故に……、病にも見えなかつたが。

僅かな疎漏もなく、謀は進んでいたはずだった。ただ一点、朝議の席に中臣鎌子が在らぬことをのぞけば。

如何する……。

葛城皇子は忙しく脳を働かせた。

鎌子の身に何か起こつたとすれば……。たとえ、今の今となつたとしても、謀は取りやめるべきではないか。

しかし……、事をなすには勢いが必要。今、取りやめれば、苦心してまとめた大官どもの総意が崩れはせぬか。彼等の賛意を再び得ることができうるか。

大王が、正面の椅子に坐し、大官どもは揃って頭を上げた。

葛城皇子の傍らに、初めて朝議に列した大海人皇子がいた。強張つた面持ちで、不安げに瞳を

動かしている。

左右を見回していた大王の眼差しが、大海人皇子で止まつた。

「大海人皇子か？」

大王が不審な面持ちで問うた。

「皇子が、朝議に列するとは、聞いておらぬ」

大海人皇子は、息を呑んで俯いた。確かに、王族とはいえ、何の官職もない大海人皇子が、朝議の席に連なる資格はない。

さらに、葛城皇子に命ぜられ、長柄宮の太極殿に参内したものの、そこで何が行われるか、あるいは、何のために朝議に侍るのか、大海人皇子は何も知らない。

黙して語らぬ大海人皇子に、大王は重ねて問うた。

「応えよ」

大海人皇子は立ち上がった。何か言おうとして、口ごもつた。

もはや、引き返せぬ……。葛城皇子は意を決した。

「大王よ！」

葛城皇子は、席を立ち、大海人皇子の袖を引いて、大王の御前まで進み、片膝を突いた。

「是非とも、議せられたき事あり。それ故に、弟なる大海人皇子を伴つて参つた」

大音声を張り上げる葛城皇子に気圧され、豊日大王は、わずかに後ずさつた。

「飛鳥に留めおきし大海人皇子の曰く、今や、飛鳥の古京は荒れ廢れ、無頼の者の横行し、民

は苦しみ、宮も寺も破れ毀たれる有様。否、飛鳥のみならず……」

大海人皇子は、眼を見開いて葛城皇子を見た。そのようなことを口にしたことはない。飛鳥は、確かに寂れたものの、安らかに静まっている。

「諸の国や邑の民は、度重なる使役に疲弊し、重き税に苦しみ、田畑を捨てて逃散する者少なからず、これ、ひとえに大化改元以来の政事の改新に因るものとの声、大和の隅々に満ちあふれ……」

豊日大王の貌が青ざめた。

「すなわち、吾、ここに策を献ず。すみやかに都を飛鳥へ戻し、政事を大化以前へ復せしめ、民を休ませ、その生業を富ましめるべし」

「葛城皇子よ！」

大王は声を震わせた。

「長柄宮は、造り了えられて未だ間もない。何故に汝は、この宮を捨て、飛鳥へ遷れと言うか」

「これは吾の意にあらず！」

葛城皇子は立ち上がり、さらに叫んだ。

「民の声なり！」

「まことにそれが民の声ならば」

大王は喚いた。

「百官の人々は汝に賛するはず。如何ぞ」

大仰に胸を張り、大王は左右の官どもを見回した。

「されば！」

葛城皇子は、得たりとばかり、踵を返し、居並ぶ大官に向かった。

「吾が策に意を同じくする人々は、吾とともに飛鳥へ！」

皇子は、大王に背を向けたまま、大股に太極殿の扉に向かって歩み始めた。

大王はくずおれ、椅子に座り込んだ。

大官どもが一斉に立ち上がり、葛城皇子の後を追って歩み始めたのだ。

何時の間に……。

豊日大王は、呆然と己に向けられた大勢の背を見つめた。

官の支えのない大王など、無力な存在にすぎない。否、かくも大がかりな謀が進んでいることに、大王は毫も気づかなかった。すでに彼は、名ばかりの大王にすぎなかつたのだ。

「待て！」

大王はやつと声を振り絞った。

「汝等は……、大和を統べる大王に背くか」

「然り！」

葛城皇子は歩みを止めて振り返った。

「民の恨みの声もその耳に届かず、心動かされぬ大王は、もはや大王ではない」

「では……汝が、吾に代わり、大王となるのか」

喘ぎつつ問う大王に、葛城皇子は笑みを浮かべて返した。

「まずは飛鳥に還り、神意を問う」

再び、扉へと歩みだした葛城皇子の背後に、声が飛んだ。

「確かに……」

女の声だった。聞き覚えがあった。

葛城皇子は歩みを止め、凍り付いたように動かなくなった。

「飛鳥へ還る、と言ったな！」

振り向いた大官どもの口が、一斉に息を呑み、やがてざわめきが拡がっていった。

椅子にくずおれた大王の背後に、白い布を纏った女どもが居並んでいた。

その中央に、宝皇女が立っていた。

宝皇女は、古の巫女のように、白い衣に白い裳、首に掛けた白い巾が、左右の肩から足下まで垂れ、ほどいて背に垂らした黒髪、頭には青々とした葉が実った真折の鬘が巻き付けられ、右手には笹竹、腰には倭文布の帯が締められていた。

その偉容に、群臣は固唾を呑み、動かなかった。

葛城皇子のみが、宝皇女に背を向けたままだった。

あれは……。

大海人皇子は、宝皇女の背後に控える五人の女たちに、眼を見張った。

宝皇女の左右には、土蜘蛛の鏡郎女と安見娘。さらに見知らぬ五人の女。いずれも、白い巫女装束。

それよりも、鏡郎女の手に、高々と掲げられたもの……。

七枝の剣……。

大和を統べるべき王が持つという剣。それを眼にするのは初めてであったが、太い刃の左右に三本づつ、小さな刃が枝のように生えていた。

まさか、額田郎女が……。

大海人皇子は、面を着けたように心を表に現さぬ鏡郎女を眼を凝らして見つめつつ、額田郎女の言が脳裡に蘇るのを覚えた。

土蜘蛛は、誰にも随わぬ……。

皇子の意のままに動くかどうかは、分からぬぞ。

「葛城皇子よ」

宝皇女が勝ち誇ったように言った。

「何故に、汝が母を見ようとはせぬ」

葛城皇子は、唇を噛みしめつつ、振り向いた。

何時の間に……。母なる宝皇女は、眼前で寵愛した蘇我鞍作を殺され、廃れ人となって有馬宮に籠められていたはず。

痩せさらばえ、こけた頬に虚ろな眼差しをしていた母なる先の大王は、貌色も艶やかに、大きく開いた上衣の胸元から豊かに盛り上がった胸乳の谷間をきらめかせ、権高に微笑んでいる。

その左右の鏡郎女と安見娘を見て、葛城皇子は喉の奥でうなった。

土蜘蛛どもが、謀ったな……。

宝皇女は、椅子にしがみつきの、細かく震える豊日大王の傍らを、ついと歩み過ぎ、群臣たちの群のなかに進んだ。群臣どもは左右に分かれた。

冷たい眼差しで群臣どもを見つめていた宝皇女は、不意に、一人の官を指さした。

「汝」

指さされ、貌を青ざめさせたのは佐伯小麻呂。

「そして」

宝皇女は、もう一人の官に、人さし指を突きつけた。

「汝、前に出よ」

稚犬養網田わがいぬかいのあみだだった。かつて、飛鳥の板蓋宮の大極殿に、宝皇女の眼前で蘇我鞍作の軀を切り刻んだ二人は、その功により、朝議に列する位を与えられた。

二人は、おずおずと皇女の前に片膝をついて拝礼した。

「立て」

宝皇女の声が、刃のように二人の背に刺さった。二人は、息を荒げて、立ち上がった。

とたんに悲痛な叫びが大極殿の内に響いた。

宝皇女は、佐伯小麻呂と稚犬養網田の股間に、次々と膝を打ち込んだのだ。

屈強な二人が、股間を両手で押さえてうづくまるのに、葛城皇子は総身が冷たく氷り、震えが止まらなかった。

母は覚えている……誰が、蘇我鞍作の息の根を止めたのかを……。

「汝等に問う」

齒を食いしばって激痛に耐える小麻呂と網田を一瞥し、宝皇女は言った。

「汝等は、吾が板蓋宮を、蘇我鞍作の血で穢けがした。誰の命でか」

小麻呂と網田は、やっと貌を上げ、そつと葛城皇子を見やった。

「やはりな」

二人の眼差しの先にある葛城皇子を見やり、宝皇女は唇の端を歪めて笑った。

「さらに問う。汝等は、誰を大王に即けんとして、鞍作を討ったか」

群臣たちの眼差しが、そつと豊日大王に注がれた。大王は弾かれたように立ち上がり、喚いた。

「姉なる皇女よ！ 吾は、ただ……」

「姉なる皇女だと！」

宝皇女は眉根をつり上げ、数歩走り出て、叫んだ。

「吾は、汝に大王の御位を譲った覚えはない！」

豊日大王は、床に尻を落とした。宝皇女は覆い被せるように声を張り上げた。

「それ故に」

宝皇女は振り返り、葛城皇子を見た。

「汝は、この難波を捨て、飛鳥に還るべしとの策を献じたのであるな！」
踏みとどまれ……。

葛城皇子は念じた。

ここで引けば、後々に禍根かこんを残す。

吾が大業は、挫ける。

だが、声が出なかった。何故に声が出ぬ……。

ふと葛城皇子は、しきりと二つのふぐりが鈍く痛むのを覚えた。彼が恐れていたのは、不意に現れた宝皇女だけではなかった。その背後に控える鏡郎女……。

箸墓の土蜘蛛の邑で、鏡郎女に責め苛まれた記憶が、皇子を怯えさせていたのだ。

「ならば……」

宝皇女はさらに振り返り、右腕を伸ばして豊日大王を指さした。

「弟よ、汝こそは、大和の大王が御位を奪った大逆の者」

安見娘と鏡郎女の背後にいた三人の女が進み出た。一人が大王の背後から股間を蹴り上げ、叩いて腰を折った大王の脇に両手を通して羽交い締めにして立たせた。

「さらば、討て！」

一人の女が、大王の股間に膝を打ち込んだ。もう一人の女が、さらに大王の股間を爪先で蹴った。大王は白眼を剥き、烈しく痙攣した。

大王を羽交い締めにしていた女が、手を離れた。床にくずおれた大王に、三人の女が襲いかかった。大王の偉容を飾っていた衣服はすべて剥ぎ取られ、裸に剥かれた大王の貌を一人の女がまたがって押さえつけ、残る二人はふぐりを一つずつ掴んだ。

甲高い絶叫と、肉の潰れる音が、大極殿に響いた。

「鏡郎女」

血反吐をはき、膨れあがった陰囊を両手で覆い、仰向けに臥せたまま声にならぬ呻きを漏らして震える豊日大王の哀れな裸身を見おろしつつ、宝皇女は右腕を伸ばした。その手に、鏡郎女は七枝の剣を渡した。

大極殿に差し込む陽の光を浴びて輝く七枝の剣を掲げつつ、宝皇女は葛城皇子にゆっくりと歩み寄った。

「如何した」

俯いて貌を上げようとしないう葛城皇子に、宝皇女は冷ややかに言った。

「汝らしくもない。剛毅な心根はいづくへ消えた」

葛城皇子は、やっと母なる皇女に、眼差しを向けた。唇が白く乾いていた。

「吾は、飛鳥へ還る。疾う飛鳥に都を遷せ」

静かな声音に、やっと葛城皇子は口を開いた。

「諾」

「板蓋宮を、吾が王宮とする。異存はないな」

「……否」

「否？」

訝しげに首を傾げる皇女に、葛城皇子は応えた。

「板蓋宮は、血で穢された故に」

「ならば焼き払え！」

声を張り上げた皇女に、葛城皇子は眼をそらして俯いた。

「焼き払って穢れを浄め、再び宮を造れ！ 板蓋宮よりも、否、この長柄宮にも勝る壮麗な宮を建てよ！」

皇女は七枝の剣を振り上げた。

「そもそも、板蓋宮を血で穢したのは、誰ぞ！」

剣が、葛城皇子の肩にまっすぐに振り下ろされた。

群臣が小さな叫びを上げた。大海人皇子は眼をつぶり、袖で貌を覆った。

甲高い哄笑が鳴り響いた。

葛城皇子は、うつぶせに床に倒れていた。

宝皇女は狂ったように身を折って笑った。その手に提げた七枝の剣は、真ん中から折れていた。その折れ目から、裂けた木の肌が覗いていた。

「心安んじよ」

大海人皇子の傍らに、鏡郎女が立っていた。

「まことの七枝の剣は、未だ見つからぬ」

虚を突かれて口を開いた大海人皇子に、鏡郎女は微笑んだ。

「生木を削り、銀を貼っただけ」

背後で葛城皇子が呻いた。右手で左の肩を押さえ、半身を起こした。

「額田郎女は、何も言わず、何も知らぬ」

その名が鏡郎女の口から漏れた時、大海人皇子は足を前に踏み出し、問おうとした。だが、鏡

郎女はついと歩みすぎ、宝皇女の傍らに侍した。

「汝は」

宝皇女は、大海人皇子を見た。

「大海人皇子であるな」

「……然り」

「吾とともに来よ」

軽く微笑んで命じた宝皇女は、たかだかと言い響かせた。

「飛鳥へ、還るぞ！」

宝皇女は、左右にさっと分かれた大官どもを見ようとせず、扉に向かって歩きはじめた。

鏡皇女が、大海人皇子の腕を叩いて促した。

皇子は、葛城皇子を見やった。異母兄なる皇子は、魂が抜けたように虚ろな眼で坐したまま、動かなかった。

再び鏡郎女に腕を叩かれ、大海人皇子は五人の女たちとともに、宝皇女の後を追った。

宝皇女の姿が大極殿から消えるや、大官どもの半ばは弾かれたように扉に向かって走り、半ばは葛城皇子を囲んだ。

宝皇女を追った大官どもは、太極殿の前庭に片膝を突いた人の群を眼にし、立ちすくんだ。

百を越える、白い装束の女たちだった。四列を作って並び、中央に、豪華な天蓋つきの巨大な輿が据えられていた。輿は、数人を載せる大ききで、その回りに半裸の男どもが十人ばかり、控えている。

宝皇女は、ゆつくりと庭に降り立ち、輿に座った。鏡郎女と安見娘がそれに続き、大海人皇子を手招きした。

「皇子も」

鏡郎女が微笑んだ。

「載りたまえ」

大海人皇子がおずおずと輿に載り、尻を据えると、女どもが一斉に立ち上がった。二十人ばかりの女は、笙や琵琶、鉦を手にしていた。

高らかな楽の音が響き渡り、男どもが輿を肩に担いだ。

難波の人々は、突如、長柄宮の門を発した行列に、眼を見張った。

鮮やかな色とりどりの旗幟を先頭に、楽を奏でる女どもが続ぎ、巨大な天蓋に覆われた輿を中心に、百を越える列はしらずと進んでいった。

あれは、宝皇女ではないか……。

低い位にある官人の漏らした吹きが、たちまち難波をめぐった。この時代、多くの民人にとっては、大王よりもより身近な権威は、巫女であった。邑々の生業は、巫女が口にする神の言葉によつて動く。

巫女装束に身を包んだ宝皇女の艶やかな姿は、民人にとっては、新たな女神の降臨に等しかった。

行列は、川にさしかかった。岸辺に船が五艘、繫げられていた。長さが十歩（約20メートル）、幅が五歩。いずれの船にも高樓が設けられ、宝皇女をはじめ、女どもは船に乗り込むなり、階梯を昇つて楼に坐した。左右の舷には、半裸の男どもが十人ずつ、櫂を握っていた。

五艘の船は、華やかに漕ぎだした。川を遡れば、半日で飛鳥に着く。

「あの男どもは……」

高樓の欄干に肘を載せた鏡郎女が、傍らの大海人皇子に言った。

「いずれも、吾等が奴」

「奴？」

「女ばかりでは、土蜘蛛の里も立ち行かぬ」

鏡郎女は、腕を動かして櫂を漕ぐ男どもを見おろしつつ言った。

「故に、罪人どもを奴として働かせている」

「罪人……如何なる罪か」

「女を殴り、姦し、辱め、苦しめた男ども。吾等は、そんな男どもに罰を下す。すなわち……」

鏡郎女は、大海人皇子を見やつて微笑んだ。

「ふぐりを二つながら砕き、吾等が奴とする」

大海人皇子は、身を硬くして、男どもを見た。五艘の船を動かす百人の男ども。いずれも、ふぐりを奪われている……。

「慰みに女を姦す男どもは、みな、そうなる。否、そうならしめる国を造る」

笑みを収め、鏡郎女は、瞬きもせず言った。

高樓の中央に坐す宝皇女は、背を伸ばし、貌を上げ、宙の一点を見つめている。その厳かな姿

に注がれる、川辺の民どもの眼差しを浴びながら。

「吾等は今宵、河辺宮に泊まる」

鏡郎女は、不意に貌を大海人皇子に向けて言った。

「河辺宮に？」

「然り」

頷く鏡郎女に、大海人皇子は戸惑った。

河辺の地には、大海人皇子が住まう宮と、葛城皇子の宮がほど近く並んでいる。難波に遷った葛城皇子の宮は、広さは十分だが、住む人もなく荒れ果てている。大海人皇子の宮は狭く、百人の女どもを入れるほど大きくはない。

「いづくの宮に……」

そう問うた大海人皇子に、鏡郎女は応えた。

「宝皇女は、大海人皇子の宮に住まう。吾は、安見娘をはじめ十人の女どもとともに、皇女に随う。他の女どもは、箸墓に還る」

「しかし」

大海人皇子は、額の汗を拭いつつ言った。

「何も調べてはおらぬ」

「かまわぬ」

鏡郎女は微笑んだ。

「いづれ、板蓋宮の地に、新たな宮を造る。それまで、食を供し奉れば、それでよい」

「新たな宮とは……」

大海人皇子は問うた。

「すなわち、王都を難波から飛鳥へと遷すのか？」

「王都とはすなわち、大王のいます宮」

鏡郎女は、歌うように言った。

「大和の大王は、いまだ、豊日大王」

「さらば」

大海人皇子は、言を選びつつ言った。

「宝皇女は、大王の御位には即かぬ、と？」

「数多の民が慕い来れば、大王の御位にあらずとも、そこが王都となる」

鏡郎女は、河辺に眼をやった。立錐の余地もなく、民どもが集っている。なかには、馬に乗った官らしき者も少なくない。

「それが御稜威。そうではないか？」

問い返され、大海人皇子は口を噤んだ。

土蜘蛛の乙女どもに、ふぐりを潰された豊日大王を、あえて大王の御位に留めおく。宝皇女は、皇女のまま飛鳥に新たな宮を造る。葛城皇子は、大官どもに、大王を見捨てて飛鳥へ遷るよう謀を進めていた。謀は、土蜘蛛に奉じられた宝皇女によってかすめ取られた。

飛鳥へ還るべく調べていた大官どもは、たとえ葛城皇子が動かずとも、宝皇女に随うであろう。土蜘蛛の恐ろしさは、蘇我毛人・鞍作父子の滅亡によって、大官どもの脳裡に刻まれている。

大王の御位にありながら、随う官を持たぬ豊日大王。大王の御位に即かぬまま、官どもを随わせた宝皇女。いずれが大王にふさわしいか、ふさわしくない者が大王であることよって、鮮やかに示されよう。

大海人皇子は、宝皇女に眼をやった。

数多の眼差しを浴びつつ、薄く眼を開けて坐しつつ、身じろぎもせぬ皇女。

有馬宮に押し込められ、廢れ人となっていた皇女を奉じ、豊日大王を廢し、鏡郎女は何をなそうとしているのか。新たに造る国とは、如何なる国なのか。

否、葛城皇子や中臣鎌子が、このまま手をこまねいているはずがない。

再び、軍となるのか。

「中臣鎌子は」

不意に鏡郎女が言った。

「安見娘が、ふぐりをひとつ、砕いたぞ」

それで……、大海人皇子は、慄然と思つた。内臣たる鎌子が、朝議に姿を見せなかったのか。

側近く謀をともに練つてきた鎌子に瀕死の傷を負わせられ、それでもなお、土蜘蛛に抗う力が、葛城皇子にはあるのか。

宝皇女を前に、何もできなかった葛城皇子に。

「して、汝は……」

緻密な謀を、みごと成し遂げた鏡郎女は、皇子の問いに、わずかに眼差しを向けた。

「如何なる国を造ろうと？」

郎女の唇から笑みが消えた。眼差しを川面に向け、応えようとしなかった。

陽が沖天に昇り、やがて傾き始める頃、河辺から寺の塔や、美しい姿の山々が何え、五艘の船は飛鳥に入った事を示した。

「皇子よ」

欄干にもたれたまま、川面を見つめていた鏡郎女が、ふと貌をあげた。

賢しげに人を見下すような眼が、いつになく、思い詰めた色を浮かべていた。

「今日の謀を、額田郎女は知らぬ」

額田郎女の名に、大海人皇子は、長柄宮での鏡郎女の言を思い出した。

……まことの七枝の劍は、未だ見つからぬ。

鏡郎女は、大海人皇子が額田郎女に、伊勢で七枝の劍の在処を探るよう、頼んだことを知っているのだろうか。

「額田郎女が、伊勢に赴いたことは知っている」

伊勢に……。皇子の頼みに、額田郎女は言った。

吾は、土蜘蛛として、七枝の劍の在処を、阿礼に問おう。

土蜘蛛は誰にも随わぬ。

皇子の意のままに動くかどうかは、分からぬぞ。

宝皇女が長柄宮に現れたとき、背後に随った鏡郎女の手には、七枝の劍があった。それを見て大海人皇子は、額田郎女が阿礼から七枝の劍の在処を聞き、皇子には知らせず、鏡郎女に渡した

のかと思った。だが、鏡郎女が手にしていた剣は、生木に銀を貼っただけの贗物にせものだった。

額田郎女は、今はいずくにある。阿札に何を問ひ、阿札は如何ように応えたのか。

「何故に、額田郎女を、この謀に加えなかつたのか、皇子には分かるか」

そう問う鏡郎女の眼が、悲しげに潤んでいるのに、皇子はたじろいだ。

「額田郎女の眼は、清く澄んでいる」

鏡郎女は、皇子から眼をそらし、眩くように言った。

「その手を、穢したくない」

故に……、鏡郎女は続けた。

「額田郎女を、土蜘蛛に還すな」